公牘匯印全集

第九卷

谷崎潤一郎全集　第九卷
定價一三〇〇圓
昭和四十二年七月二十五日初版發行
昭和四十八年六月十一日普及版發行
著者　谷崎潤一郎
發行者　山越　豐
印刷者　白井倉之助
發行所　中央公論社
東京都中央區京橋二―一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

目次

肉塊　一
神と人との間　一九九
雛祭の夜　四〇九
港の人々　四二七
無明と愛染　四六三
腕角力　四八九

肉

塊

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

大正十二年一月—四月「東京朝日新聞」

一

すべて、或都會の特色を知るにはその都會での一番賑やかな街を歩くのが捷徑である。東京なら日本橋か銀座通り、大阪なら道頓堀か心齋橋筋、上海なら大馬路か四馬路、北京なら八大胡同、巴里ならシャンゼリゼエ、伯林ならウンテル・デン・リンデン、――――それらの街はそれぞれその都會の心臓である。――――と、人はしばしばさういふ風に考へたがるものであるが、しかし必ずしもそんな賑やかな街通りでなくとも、たとへば何處の都會にでもよくありさうな裏長屋の路次のやうな場所であつても、注意して見れば何かしらその地方でなければならない獨得の空氣があるものである。私たちは時々活動寫眞の中で、歐羅巴や亞米利加の街を見せられることがあるであらう。さうしてそれらが同じ映畫の中に出て來ても、やつぱり何處か違つてゐることを感じずにはゐないであらう。不思議なことに、その違ひは歐羅巴と亞米利加ほどでない、ほんの僅かな距離の間に於いてでも見出される。自動車に乘つて東京市内を走らせるとする、――――をりをりはッと氣が付いて、「今何處を走つてゐるんだらう?」と、ひよいと窓の外を覗く。若しも乘り手が東京をよく知つてゐるなら、ただそれだけで此處は四谷だとか、芝だとか、淺草だとか、深川だとか、大凡その見當がつく筈である。芝と四谷と、何處が違つてゐるのだかは分らないが、それが何となく嗅ぎ分けられるのである。

さういふ意味で、街をぶらぶら歩くと云ふことは實に面白い。單調な田舍路や海岸などを歩くよりも遙かに面白い。僅か一丁か二丁のところにも無限の變化がある、朝と夕方でも相違がある。街に由つては一日のうちに何遍そこを通つても飽きないやうなところがある。横濱の元町通りなども或はさういふ街通りの一つではないかと作者は思ふ。それは小ひさく纒まつた、北側に山を控へてゐる、可愛い美しい街なのである。路の幅は東京の仲通りぐらゐしかない、そして長さは七八丁ばかりのただ一とすぢの線ではあるが、今もいふ北側の山から幾本もの坂路がその線へ通じてゐて、山の上にある外國人の居留地から、朝に夕べに各國の人々がいろいろな風俗をしてその坂路を降りて來る。彼等は何處へ行くのにも必ずそれらの坂路の孰れかによつて、一遍そこの街通りへ出て來なければならないのである。坂はいづれも勾配が急で、後押しがなければ俥が登れないぐらゐなので、それでなくても散歩好きな西洋人たちは、男も女もぞろぞろ歩いてやつて來る。坂の中途から街通りへかけて、彼等を相手に商ひをする花屋、洋服屋、婦人帽子屋、西洋家具屋、パン屋、カフエエ、キユウリオシテイー・ショップなどが一杯に並んでゐる。――――が、それらの店はどれもこれも多くは古めかしい土藏づくりの、ただ前の方だけへガラスを嵌めて飾り窓を拵へたりしたささやかな構へで、銀座あたりの大商店とは比較にならない。寧ろ堀留か傳馬町邊の老舗の造りに似てゐるのだが、窓に飾つてある物が花でも菓子でも切れ地でも西洋向きの派手な色彩に富んでゐるから、落ち着きのある中にもケバケバしい趣があつて、勿論堀留や傳馬町とは街の感じがまるで違ふ。さうかといつてこんな所が外國にある譯はないから、矢張り日本の横濱でなければ見られない街通りなのである。

波止場の方からそこへ行くには、海岸通りを眞つ直ぐにグランド・ホテルの前に出て、その角を右へ曲ると、港へそそぐ一とすぢの掘割があつて、谷戸橋といふ橋がかかつてゐる。西洋人がウオター・ストリートと呼んでゐる山下町の往來の北のはづれにある橋なので、橋の向うに川を隔ててグランド・ホテルと向ひあつた佛蘭西の領事館がある。その、もう今日では時勢おくれのしたらしい建物のうしろにはずつと居留地の山がつづいて、高い高い丘の上にさまざまな形をした西洋館が入り亂れて並んでゐるところは、――赤い屋根瓦や、いろいろに塗り立てた壁の色や、ゴシツク風の教會の尖塔や、海へ向つて突き出てゐる露臺や、――――それらのものがきらきらと日に映えながら、青空の下にくつきり浮かんでゐる景色は、ちやうど昔の石版畫か何かに有りさうな圖で、始めて横濱へ來た者だと誰しもちよつと異様な感じがするのである。さてその橋を渡り、領事館の前を川に沿うて右へ進み、藥師堂の角を左へ折れればそこが元町通りであつて、丘と掘割との間に挾まつた、狹い細長い區域の兩側に家が並んでゐるのである。支那街へ行けば支那街特有の臭ひがするやうに、西洋人の往き來の激しい、西洋向きの品物ばかりを賣つてゐるこの街通りにも一種特別な匂がする。葉卷の匂、チヨコレートの匂、草花の匂、香水の匂――――それらのうちでも最も強い葉卷の匂と、ココアだのコーヒーだのを煮つめたやうな匂とが一つになつて、往來の空氣の中にこつそり柔かく溶け込んでゐる。よく晴れた日の、うらうらとした春の午後などにそこを通ると、甘い優しいその薫りがそよそよとした微風の底を流れながら、折々ふうわりと、女の手の様なしなやかさで鼻先を嬲(なぶ)つて行くのを感ずるであらう。時にはそこの空氣全體が、びろうどに似た觸感を以てその人の頰を撫でるであらう。で、それでなくても明るい街が、春は一層明るくなる。空の色や、水の流れや、山

の上の樹々の梢や、そんなものよりも春は最初にさういふ街のショウ・ウインドウにやつて來る。地の下から青いものが芽を吹く前に、つやつやと研かれたガラス窓の中に花といふ花が並べられ、それらの花よりも朗かな薔薇色、綠色、琥珀色などの燃えるやうな肌を持つた輕い絹地が飾り立てられる。坂を降りて來る西洋婦人の肩からは毛皮の外套がだんだんに取のけられて、うすい羅紗地のスプリング・コートになり、ひらひらとした佛蘭西繻子のマントになり、やがて肩かけ一枚になり、簡單なスウエーターだけになり、肉づきのいい白い腕だの胸だのがうすものの下から露はに見えるやうになる。それらを見ると、「ああ春が來たんだな」と、誰しもさう思はずにはゐない。

恰もさういふうらゝかな春の陽氣――――大正十年の三月の半ばころ――――そこから此の物語りは始まるのである。

小野田の家は古くからその街通りの北側に可なり大きな西洋家具の店を出してゐた。それは例の坂路の一つに通ずる四つ角のところにあつて、造花屋と、支那人の裁縫師と、浮世繪や古美術などを賣つてゐる骨董屋に向ひ合つた、間口のひろい、總二階の土藏造りの構へであつたが、ちやうど此の話の始まる頃にはその店の方は既に人手に渡つてゐて、そこの角から程遠くない横丁にある工場と、倉庫と、家族の住んでゐる本宅だけが殘つてゐた。山の方からやつて來ると、俗に「異人墓（いじんばか）」と呼んでゐる外國人の墓地の傍の、急な段々のある坂路を降り切つた所に、片側にビールの空壜などが積んであるごみ捨て場のやうな空地があり、片側に表通りとはまるで違つた湯屋だの魚屋だの八百屋だのが並んでゐる妙に不規則なむさくろしい一廓があつて、そのあき地のすぐ隣に、何となく近所の空氣とは調和しない意氣な格子戸の家があるの

を、土地の人なら誰でも知つてゐる筈である。が、不調和なのはそればかりでなく、その格子戸の家に接して、粗末な木造の、鍛冶屋の店のやうな工場と、古ぼけた煉瓦作りの倉庫とが建つてゐた。

「店を譲つたくらゐならなぜあの倉庫や工場をつけて賣らないんだらう？　あゝして立ち腐れにして置いてどうする積りなんだらう？」

と、それは長いことその界隈での噂にのぼつた。倉庫の中には何一つ品物が殘つてゐるではなく、空つぽのまゝ戸締りがしてあり、工場の方はいつの間にやら板戸さへも外されて、そのうす暗い屋根の下が子供たちのいゝ遊び場になつてゐた。そして人々がそれよりもなほ怪しんだことは、當主の小野田吉之助の考へであつた。あれだけの店を、別に商賣が立ち行かないといふのでもないのに、なぜ惜氣もなく手放してしまつたのか。外に何かしら目ろんでゐる仕事でもあるのか。――それならそれで何か始めさうなものだのに、一向そんな様子もない。さうかといつて、怠け癖のついた道樂者といふでもなく、人間は寧ろ堅造の方で、妻の民子と、六つになる娘の秋子と三人の家族は極く平凡に、幸福な月日を送つてゐるらしかつた。夕方になると、夫婦が娘の手を曳いて散歩に出かける睦しい姿が、よく人の眼に止まつた。民子は廿六七の、小柄な、色の白い、悧巧さうな小ひさな眼をした中高の顔の女で、この近邊の人には珍らしい品の好い髷に結つて、いつも質素な背廣服を着た夫の傍に寄り添うてゐるのが、何となく古風に床しく見えた。秋子は母親にそつくりの面立をした可愛らしい子供だつた。母が手編みの細工らしい白い毛絲の帽子を被つて、同じ色のジャケツを着て夫婦の間に挾まりながらちよこちよこ歩いて行く形が――西洋人形のやうであつた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「まあ、お嬢さん、どちらへお出かけでございます。」
などと近所の人々が聲をかけると、彼女はきつとはにかむやうに母親の袖の下に隠れる。
「ちよつと伊勢崎町の方まで運動に行つて參りますの。」
と、そんな場合に、民子はニコニコ笑ひながら、誰にでも如才なく愛嬌をいつた。やゝ陰鬱で、重々しい所のある夫とは反對に、彼女はさうした物のいひ振りにも、生れつき人なつツこい所があつた。
運動に行くと云つても、活動寫眞を見て歩くか、子供の玩具を買つてやるか、たかだかそんな事ぐらゐで、別に晴れがましく着飾つて出るのではなし、此れと云ふほどの贅澤をするのでもない。晝間は秋子はつい坂の上の、佛蘭西人が經營してゐるカソリツクの幼稚園に行く。妻の民子は階下の茶の間に引き籠つて、針仕事をするとか、毛絲の編み物をするとかしてゐる。そして夫の吉之助は、朝から一日二階の書齋に上つたきり、何かしきりに調べ物や書き物に熱中してゐた。午の食事におりて來ても默つてこそ〳〵と飯を濟まして、直ぐ逃げるやうに二階へ上がる。親子三人がほんたうに打ちくつろいで顏を合すのはいつも夕飯の時であつた。それから後は夫は全く樂しい家庭の父となつて、妻や子供の相手をしながら夜を過すのが常であつた。
吉之助は一體何を調べたり書いたりしてゐるのか、――それをうす〳〵知つてゐるのは民子だけだつた。
「お前だけは己を了解してゐてくれるね、己には昔から友達らしい友達は一人もなかつた。二人の伯父があつたけれどそれさへ今は己を見捨てゝしまつたのだ。己はほんたうに獨りぼつちだよ、お前より外に己の味方はないんだから。」――寢物語りの折などに、さういはれると民子はいつもその一言に感謝しな

いではゐられなかつた。

「えゝ、私あなたをきつと信じます。」

と、彼女はさういつて、六七年前の新婚當時のやうな氣持ちで、しつかりと夫の手を握つた。

「……伯父さんにしろ誰にしろ、どうせ親類なんていふものは分らず屋が揃つてゐるんだから、そんな人たちをあてにしないで、どうかあなたの好きな仕事をやつて下さい。立派にやり遂げて世間の人を驚かしてやつて下さい。」

「うん、己はきつとやり遂げる。今に必ず、親類の奴等があツといふやうな仕事をして見せる。――――たゞこの仕事をするのには、己は覺悟をしてるからいゝが、お前の辛抱が肝腎だからね、お前が己を助けるつもりで、辛い時や苦しい時をこらへて行つてくれなけりや、とても成功はしないんだよ。」

「あたし、どんな事だつて辛抱するわ、子供さへ滿足に育てゝ下されば。――――」

そんな會話を夫婦はしば〳〵繰り返した。吉之助は、民子の小ひさな悧巧さうな眼がパツチリと、自分の顏を訴へるやうに見つめてゐるのを眺めると、彼もやつぱり新婚當時のやうな氣持ちになるのだつた。六つになる子供の母ではあるが、それほど民子はまだ初ひ初ひしい娘のやうなところのある女だつた。といふのは、肉體の感じからではなく、彼女の無邪氣な、さうして常に夫に對して若々しい愛情を持つてゐる素直な性質から來るのだつた。

「自分の妻が斯ういふ女でなかつたら、自分は恐らく今度の仕事を企てる勇氣はなかつたゞらう。また企てゝも成功しなかつたに違ひない。」

と、吉之助は私かにさう思つてゐた。新妻のやうな心持ちで、絶えず自分を深く深く愛してやまない妻があること、――それが自分の萬難を排して今度の計畫をなし遂げようとする勇氣の源泉である事を彼は感じた。

民子は最初、夫の口から「いよいよやる」と云ふ決意を聞かされたとき、夫がそれほど熱中して心を傾けてゐるものを、妻たる者が阻止することは道でないと、たゞ一途にさう思つた。一旦かうと云ひ出したら容易に後へ退かうとしない剛情な夫が、今更他人の忠告などを用ゐる筈はないのであるから、事の成否は兎に角として、倒れるまでも夫の跡に從つて行かう。――彼女は單純に、生一本に、さう考へるより外はなかつた。夫が日夜あこがれてゐる活動寫眞といふものの事業の性質、――小野田スタディオの設立、高級映畫の製作と販賣、――さう云ふ仕事が何を意味するか。殊にづぶの素人の手で誰の助力も後援もなくそれをやり出すといふ事が、商賣としていかに危險なものであるか、又どれだけの立派な値打ちがあるものか。それは彼女にはハツキリとは分らなかつたが、有體に云ふと彼女はただ、そんなに迄も思ひ詰めてゐる夫がいぢらしくてならないのだつた。

「己は商人などになりたくはなかつたんだ。高等商業へ這入るときも、實は大學へ行きたかつたのに親父の反對でよんどころなく這入つたのだ。己は一生をしくじつてしまつた。」

と、舅が生きてゐる時分から口癖のやうに云つてゐた吉之助、――さうして始終何かしら夢を見てゐた吉之助、――それが今度と云ふ今度は、やつと自分の思ひ通りの仕事を遂行しようとするのに、世間は誰も相手にしない。吉之助としては多少資本を融通して貰ふ心あたりもあつたのだけれど、何分事業が事

業なので、眞面目に理解してくれるものは一人もなかつた。「よし！　そんなら己は獨立でやつて見せる」彼はさう云つて、身の廻りにある有らゆる物を犧牲に供する覺悟で立つた。有力な二人の伯父とも喧嘩をして、小野田商店の暖簾を始め、そこの家作も地所も商品も、みんな人手に渡してしまつた。讀書好きの彼が暇に任せて買ひ集めた、平生何よりも大切にしてゐた藏書までも賣り拂つて、書棚の中には新しく取り寄せた活動寫眞の參考書ばかりが堆かつた。さうして彼は一日それらの書籍を相手に考へ込んだり、製圖を引いてゐたりする。夜になつて、夫婦が寢間へ這入つてからも話は事業のことばかりである。――馬鹿だの、變人だの、空想家だのと、親類の誰彼が物笑ひの種にするにつけても、民子はどうかして夫の夢を現實にしてやりたかつた。分らないながらも彼女は夫を愛するが故に、いつとはなしに夫と共に事業そのものをも樂しむ心になつてゐた。

「なあに、お前にだつて決して分らないことはないよ。活動寫眞と云ふものは一番誰にでも分り易い藝術なのだ。それが映畫の値打ちなのだ。」

と、夫は云つた。そして一緒に伊勢崎町の常設館へ見物に行く折など、彼女はいろいろの說明をきいた。監督のこと、撮影術のこと、染色のこと、調色のこと、カツテイングのこと、――夫は夢中でそれを語つた。何とかして映畫の眞價を妻にも了解させたいといふ心持ちが、彼の態度に溢れてゐた。

「これを御覽、かういふものが今に此處へ立つんだよ。」

さう云つて、彼は或時一枚の圖面を民子に示した。圖面の中には撮影所、現像場、映寫室、化粧室――夫らのものから出來上つてゐるスタデイオの設計が作られてゐた。

「これだけのものを建てるのには、いくら狭くても五百坪の地面がいる。己があの店を賣つたときに、倉庫と工場を讓らなかつた理由が此れで分るだらう。此處にある地所と隣りの空地を借りることが出來さへすれば、それで必要な地面だけは手に入るのだ。此れを御覽、此の撮影所を空地へ建てる、そして工場はほんの少し修繕すればあれでも兎に角俳優の化粧室になる、倉庫はそのまゝ背景の道具を入れるに適當な物置きになる。たゞ困つたのは現像場と映寫室なのだ。寫したフイルムを直ぐ現像して試驗するには、どうしてもこの二つを撮影所の直ぐ傍に置きたい。己はそのために己たちの住居の一部を壞すことにした。臺所と湯殿を潰して彼處へ建てるより仕方がないのだ。お前や秋子には氣の毒だけれど。……」

夫の胸には凡べての計畫が熟してゐるらしかつた。若し充分な資金さへあるなら、もつと立派な、少くとも乾燥室の設備のある現像場が欲しいのだけれど、今の場合ではもうそれ以上地所をひろげる餘裕がない。そして家族は、三分の一に縮められた住居の方へ引き籠らねばならなかつた。それがためには今までの茶の間と庭を潰してしまつて、そこへ新たに臺所と湯殿を造る。が、それも家族が專用にするものではなく、所員一同の炊事もすれば、俳優たちの入浴にも使ふ。玄關の横の客間に充ててゐた十疊の部屋も、土足で上がれるやうに直して、そこが主人の仕事場と應接間になる。

「お前たちには窮屈だけれど、此れが辛抱の第一歩だ。當分の間我慢しておくれ。」

と、夫は云つた。

「己は何よりも金が欲しい、金さへあればもつともつと完全なものにしたいんだけれど、もう此れだけでも己には手一杯なのだ。無駄な金錢は一文でも使はないやうに、出來るだけ切りつめて行かなきやならな

い。」

民子もそれはよく知つてゐた。いよいよ仕事にかかるとなれば、普請の費用、諸機械の費用、所員たちの給料の費用、――――多くもあらぬ家の資産でそれを悉く支辨するのは容易なことではないのだつた。零碎な金をも節するために夫は大切な書籍までも賣拂つた、もうこれからは子供の着物一枚でも、うつかり買つてやることは出來ないと、彼女はそれに氣がついて、出來るだけ生活費の方も省く覺悟で、既に此の間から二人の女中を一人に減らしてゐた。場合に依つたら女中なんか使はないでもいい、親子三人の食事の世話なら自分だけでもやつて行ける。そして、家が手狹になつてからは、どの部屋を何に使つて、どう云ふ風に儉約にして行かうかと、そんな事まで彼女はちやんと考へてゐた。

「苦しいといつてもさう長いことはない積りだ、順潮に行きさへすれば二三年後にはきつと樂になる。さうしたらお前たちには何處かに家を見付けてやつて、仕事と家庭とは全然區別してしまふから。」

と、夫は慰めるやうにいふのだけれども、民子はむしろスタデイオが家庭と同じ所にあるのが、唯一の慰めであるやうに感じた。それなら自分も夫の仕事を朝夕目擊することが出來る。さうして着々夫の夢がそこに實現されて行くのを眺めることは、どんなに愉快であるか知れない。それを思ふと彼女の心は夫と同じ期待をかけてその日のことを想像する喜びに躍つた。

「おかあさん、いつからお内で活動寫眞が始まるの？」

と、秋子もそれをたのしみにしてゐた。頑是ない彼女は自分の家が小ひさくなるのは苦にもしないで、一日も早く大工が這入つて、寫眞をうつす小屋や舞臺を造つてくれて、毎日芝居を見物するやうになりたか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com